

Building lifestyle around Ferrari

いつまでも、いつまでも

2023年もフェラーリの話題は多く、フェラーリ専門誌としては嬉しい悲鳴を上げている。一方、個人的にはこの1月で50歳となり、今後の人生についてどうしても考えてしまっている。

今年もフェラーリは話題豊富だ。1月末のデイトナ24時間レースで296GT3がデビューし、2月14日にはF1マシンのSF-23を発表。このコラムを書いている直前には50年ぶりにワークス復帰した499Pのデビュー戦となる、WEC開幕戦のセブリングでポールポジションを獲得。100周年となる6月のル・マンに期待がかかるリザルトを残し、ほぼ時を同じくして3月16日にはローマ・スパイダーがデビューしている。4月8日には富士スピードウェイでフェラーリ・チャレンジ・ジャパンシリーズが開幕するし、有難いことに、フェラーリ専門誌としては話題に事欠かない状況が続いている。

ということで、今号の誌面も話題豊富だ。新車関連ではローマ・スパイダー第一報に、プロサングエ試乗記がトピック。特に大谷達也さんの技術的視点からの試乗記は非常にわかりやすいので必読。越湖信一さんによるリストランテ・カヴァリーノのリニューアルにも携わったマッシモ・ボットウーラさん紹介記事も秀逸だし、小倉茂徳さんによるF1レポートも相変わらずわかりやすく、まずは読んで頂きたい内容となっている。もちろんライフスタイル記事、連載も充実のラインナップだ。

そして表紙および巻頭特集で取り上げた365GT4/BB。この車両自体はカー・マガジンで主催したイベントで展示のご協力も頂いたことがあるご縁ある個体で、今回さらなるご縁があり、市販車デビューから50周年を記念した企画が実現した。個



体の素晴らしさもあり、藤井元輔カメラマンと現場でいつも以上に盛り上がり、特に表紙は過去ベスト3に入る仕上がりだと思っているのだが、いかがだろうか？

最近思うのは、こうした人々とのご縁の大切さだ。この1月で50歳となり、どうしてもここから10～15年の"仕事人生"について考えてしまうのだが、仮にこちらの立ち位置が変わってもずっとお付き合いしていくんだらうなと思う方が、この誌面の関係者には多い。逆にそう思うからこそ、仕事をお願いしているとも言える。そしてその多くの方は、"この人には敵わない"という方ばかりで、そんな敵わない憧れの人々に頼ってこの誌面が成立しているのだ。編集者という仕事は、自分でできないことを代わりに実現して頂き、それを"集める"ことに醍醐味がある。だから本誌の誌面作りは本当に楽しく感じている。

実は前号から今号の間に、詳しくは書かないが、今後の生き方について考えさせられる出来事があった。そこで多くの人の温かさに触れることとなり、嗚呼、残りの人生はこの人たちのために生きていけばいいのか、と気がつかされた。もしその方々が望むなら、いつまでも、いつまでも SCUDERIA を作り続けていきたい。今は素直にそう思っている。

文 ● 平井大介
text by Daisuke Hirai

写真 ● 藤井元輔 / フェラーリ
photograph by Motosuke Fujii / Ferrari S.p.A.